

筑波海軍航空隊

戦争の歴史を後世に



笠間市旭町地内には、1934年（昭和9年）から太平洋戦争終戦までの11年間、「筑波海軍航空隊」が設置されました。現在も司令部庁舎や正門、号令台などがほぼ当時のままの状態に残されており、この度、百田尚樹ひゃくた なおきさんのベストセラー小説『永遠の0』の主人公が同航空隊の教官に設定され、映画ロケ地として使用されました。今月号は、筑波海軍航空隊についてお知らせします。

― 設立 ―

昭和9年、霞ヶ浦海軍航空隊の陸上班の一部を旧友部町に移し、初等教育班として搭乗員の養成にあたる分遣隊が設置されました。ここでは、一般兵から採用された操縦練習生が、赤トンボといわれた93式陸上中間練習機で飛行訓練を行っていました。昭和12年7月、日中戦争が始まると航空機の重要性が高まり、友部分遣隊は独立して「筑波海軍航空隊」となりました。

― 戦争突入へ ―

太平洋戦争が昭和16年に開戦となると、予科練出身の練習生が多く入隊するようになり、訓練も急降下や

旋回等の実戦を意識した激しいものになっていきました。昭和19年になると、戦闘機課程の練習航空隊となり、特攻隊も編成されました。25名の隊員が比島（現在のフィリピン）第201航空隊に転出し、神風特攻隊金剛隊として出撃し、13名が戦死しました。神風特攻隊筑波隊が昭和20年に64名（のちに84名）で編成されると、練習戦闘機と零戦を使用した特攻訓練が実施され、訓練を終了した搭乗員は特攻要員として沖縄戦に参戦しました。以後、筑波海軍航空隊は実戦部隊となり、多くの若者が特攻で亡くなりました。

― 終戦へ ―

昭和20年4月には、アメリカ軍の沖縄攻撃が本格化しました。沖縄本島中部西海岸には千五百隻の艦艇が押し寄せ、上陸作戦を開始しました。日本軍は鹿屋かのやや知覧ちらんなどの九州基地から特攻隊が出撃し、必死に抵抗しました。しかし、同年5月には首里の日本軍司令部が陥落。戦闘は南部に移り、多くの住民を巻き込んでな お続きました。そして、6月23日、日本軍司令官牛島満うしじま みつる中将が自決し、7月2日にアメリカ軍は、沖縄戦の終了を宣言しました。

